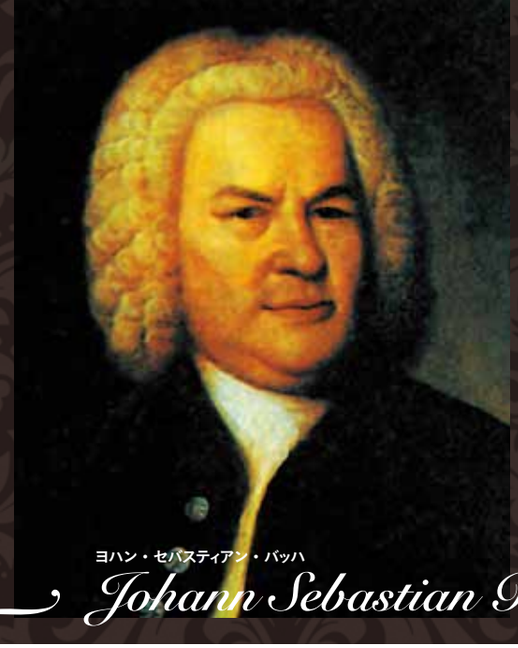

#01

ヨハン・セバスティアン・バッハ

Johann Sebastian Bach

バロック音楽の輝ける金字塔

J.S.バッハ

ドイツの作曲家。1685年3月31日アイゼナハ生〜1750年7月28日ライプツィヒ没。
オペラ以外のほとんど全ジャンルで曲を書き、バロック音楽のさまざまな様式を吸収、統合した。同時代人からは「技巧的すぎて自然さを欠く」と否定的評価を下されることもあったが、1829年にメンデルスゾーンが初演後100年ぶりに《マタイ受難曲》を復活演奏して以来、「神聖な天才」像が定着。「大バッハ」と呼ばれ、労作的研究も数多い。

バッハが宮廷楽長を務めたライプツィヒ郊外・ケーテン城、鏡の間

アイゼナハのバッハ記念館前の立像

大樹にもたとえられるドイツの大音楽家一族

ヨハン・セバスティアンが生まれた頃、生地アイゼナハとその周辺の町では「バッハ」といえば音楽家の代名詞であった。バッハ自身8人兄弟の末っ子で、一族はもともと多産系である。それが末広がりに広がりながら町々の楽師やオルガニスト、教会の音楽監督を務めていた。当時、教会のオルガニストは親族間で引き継がれてゆくことも多かったらしい。

例えば、バッハが洗礼を受けたアイゼナハの聖ゲオルク教会のオルガニストは、132年間にわたり4代のバッハが務めたという。また若きバッハが1705年に北ドイツのリューベックを訪れた時、聖マリア教会オルガニストのブクステフーデ（バッハが傾倒した北ドイツ・オルガニスト界の大御所）から後任にならないかといわれ、心動かされるが、その条件がブクステフーデの娘との結婚であったため、即座に断ったという伝説もある。バッハより2年前にヘンデルと一緒にリューベックを訪れたマッテ

バッハが洗礼を受けたアイゼナハの聖ゲオルク教会

バッハの生家

音楽人生

卒業後は各地でオルガニストの職に就き、1708年からはワイマルの宮廷オルガニストとなり、オルガン曲の多くや初期のカンタータはここで作曲された。17〜23年にはケーテンの宮廷楽長に就任、《ブランデンブルク協奏曲》や《平均律クラヴィーア曲集第1巻》などを書いた。23年から没するまでライプツィヒの聖トーマス教会のカントルを務め、墓も同教会内にある。

生いたち

親族の多くが町楽師やカントルを務め、父ヨハン・アンブロジウスも宮廷音楽家だった。1695年に両親を相次いで失い、オールドルフの町でオルガニストになっていた長兄に引き取られ、音楽の手ほどきを受ける。15歳から北部ドイツのリューネブルクで、教会附属学校の給費生として過ごす。

コンサートホールに出かける前に

知っておきたい基礎知識編

オーケストラの成り立ちは？ 楽器編成ってどうなっているの？
コンサートホールの構造は？
日本と世界のオーケストラやコンサートホールや、
お出かけの前にちょっぴり仕入れておきたい基礎知識です。

オーケストラ事始め

オルケストラが「オーケストラ」に

「オーケストラ」は日本語では普通「管弦楽団」と訳されているが、もともとは「楽団」くらいの意味で、語源は古代ギリシャにさかのぼる。古代ギリシャ劇が上演された円形劇場では中心部分で合唱輪舞隊コロスが歌ったり踊ったりしたのだが、その場所をオルケストラと呼んだのである。

クラシック音楽での「楽団」の歴史は意外に新しい。楽器は基本的に歌や踊りの伴奏用と見なされていたからで、楽器だけの合奏音楽は16世紀末あたりから登場した。時代とともに規模の大きな作品が生み出されるようになり、オペラが登場する。オペラは古代ギリシャ劇の復活と考えられており、楽団は舞台と観客の間、つまり古代ギリシャ劇におけるオルケストラに置かれたので、次第に楽団もその名で呼ばれるようになった。

オーケストラの編成や規模は、時代や状況によりそれぞれだが、時代が下るとともに大規模編成の音楽が作曲されるようになり、オーケストラもそれに伴った。近代的オーケストラのはしりは、18世紀半ばのマンハイム宮廷楽団といわれる。プファルツ選帝侯カール・テーオドルの庇護のもと、ボヘミア出身の作曲家ヨハン・シュターミツ（1717～1757）が組織したこの楽団は、当時としては大規模な50名におよぶ団員から構成され、全員ぴたりと演奏を合わせることができ、ヨーロッパ中に令名を馳せた。木管楽器（フルート、オーボエ、ファゴット、後にクラリネット）を各2本で一対とし（2管編成）、これに弦楽器（ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス）、金管楽器（ホルン、トランペット、後にトロンボーンとテューバ）、打楽器（ティンパニなど）を加えたその編成は現代オーケストラの基本でもある。

ギリシャ劇の円形劇場（撮影：細野晋司）

マンハイムのパラーデ・ウント・プロムナード広場（1779年の画）